

平成 21 年度公開研究発表会にあたって

学校長 松本 敏

新学習指導要領の実施にむけた移行措置等で何かとお忙しい中、本校の公開研究発表会に多数の皆様のご参加をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。研究発表や授業研究会で、忌憚のないご意見、ご指導・ご鞭撻を賜りたいと存じます。

本校の研究は昨年度から 3 年間、「新しい時代に対応した授業の在り方を考えるー活用型学習活動の実践を通してー」というテーマのもとに行われています。中教審答申や学習指導要領にはさりげなく使われている「活用」ですが、活用型学習活動の提案授業を繰り返して、研究を進めるにしたがって、その多義性・多様性の大海に乗り出した思いです。

活用の語義は、辞典では「そのものが本来持っている働きを活かして使うこと」(新明解)、「物の性質・働きが十分に発揮できるように使うこと。うまく使うこと」(大辞泉)というように説明されています。しかし、物の本来の性質や働きを期待する至極当然の使用の場合には、私たちは活用という言葉を使いません。たとえば、ノートに文字を書くのにどんなに鉛筆を巧みに使ったとしても「鉛筆を活用した」とは言いませんし、火を付けるのに「マッチを活用した」とも言いません。至極当然ではない使用の場合に、かえってそのものが本来持っている働きや性質が鮮やかに浮かび上がり、ハッと気づかされる瞬間があります。私たちはそういう使用をとらえて活用と呼ぶのではないのでしょうか。上述の辞典にある「うまく」という言葉に込められたものは「そうか、そう使ったのか。うまいなあ」という感嘆や発見でしょう。

私たちがこの 1 年間繰り返してきた研究授業の中でも、活用が成立したと考えられるときには、生徒は(教師も)さまざまなレベルでそのような感嘆や発見をしていました。それによって急に先の見通しが立ったり、それまで分かったつもりになっていたことを改めて深く分かりなおしたりしたのです。これこそ「活用が習得と探究をつなぐ」と言われる所以でしょう。

活用が成立するためには、至極当然ではないが後から見れば見事につながって見える文脈に、どのような知識や技能がどのように思い出され使われればよいのか。(人は持っている知識や技能をすべて思い出したり使ったりはしないものです。)そしてその想起や使用を促す教師の働きとはどのようなものなのか。――校長の個人的な感想ですが、今後そのあたりが明らかになってくれば面白いと思っています。

まだ途中の段階での発表ですが、今後の研究がさらに豊かなものとなるためにも、皆様のご指導・ご鞭撻をいただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

最後になりましたが、本校の研究推進や本研究発表会の開催にご協力いただきました栃木県教育委員会、栃木県総合教育センター、市町村教育委員会連合会、栃木県中学校長会、栃木県中学校教育研究会、栃木県連合教育会、宇都宮市教育委員会、助言者及び司会者をお引き受けくださいました先生方、並びに共同研究者である宇都宮大学教育学部の諸先生方に、心より御礼申し上げます。